第22回夏期福音特別集会（2）（鹿沢）
第一回伝道旅行
――使徒行伝第13～15章――

1975年8月23日
小池辰雄

聖霊の加護　御霊の権威　神・キリストの熱心　絶信の信　一極絶対　世は非常時　霊的根源
現実　万人救済　南無キリスト　言い逆らいの徴　喜悦と聖霊　徴と不思議　「なんじの足にて真直に起て」　せざるを得ずして動く　天地創造の神　艱難を歴て神の国に　福音か割礼か

【使徒12】

25バルナバ、サウロはその職務を果し、マルコと称うるヨハネを伴いてエルサレムより帰れり。

【使徒13】

1アンテオケの教会にバルナバ、ニゲルと称うるシメオン、クレネ人ルキオ、国守ヘロデの乳兄弟マナエン及びサウロなどいう預言者と教師とあり。2彼らが主に事え断食したるとき聖霊いい給う『わが召して行わせんとする業のためにバルナバとサウロとを選び別て』3ここに彼ら断食し、祈りて二人の上に手を按きて往かしむ。

4この二人、聖霊に遣されてセルキヤに下り、かしこより船にてクプロに渡り、5サラミスに著きてユダヤ人の諸会堂にて神の言を宣べ伝え、またヨハネを助人として伴う。6遍くこの島を経行きてパポスに到り、バルイエスというユダヤ人にて偽預言者たる魔術者に遇う。7彼は地方総督なる慧き人セルギオ・パウロと偕にありき。総督はバルナバとサウロとを招き神の言を聴かんとしたるに、8かの魔術者エルマ（この名を称けば魔術者）二人に敵対して総督を信仰の道より離れしめんとせり。9サウロ又の名はパウロ、聖霊に満たされ、彼に目を注めて言う、10『ああ有らゆる詭計と奸悪とにて満ちたる者、悪魔の子、すべての義の敵よ、なんじ主の直き道を曲げて止まぬか、11視よ、いま主の御手なんじの上にあり、なんじ盲目となりて暫く日を見ざるべし』かくてたちどころに曚と闇と、その目を掩いたれば、探り回りて導きくるる者を求む。12ここに総督この有りし事を見て、主の教えに驚きて信じたり。

13さてパウロ及び之に伴う人々、パポスより船出してパンフリヤのペルガに到り、ヨハネは離れてエルサレムに帰れり。14彼らはペルガより進み往きてピシデヤのアンテオケに到り、安息日に会堂に入りて坐せり。15律法および預言者の書の朗読ありしのち会堂司たち人を彼らに遣し『兄弟たちよ、もし民に勧の言あらば言え』と言わしめたれば、16パウロ起ちて手を揺して言う、『イスラエルの人々および神を畏るる者よ、聴け。……30されど神は彼を死人の中より甦えらせ給えり。……36それダビデは、その代にて神の御旨を行い、終に眠りて先祖たちと共に置かれ、かつ朽腐に帰したり。37然ど神の甦えらせ給いし者は朽腐に帰せざりき。38この故に兄弟たちよ、汝ら知れ、この人によりて罪の赦しのなんじらに伝えらるることを。39汝らモーセの律法によりて義とせられ得ざりし凡ての事も、信ずる者は皆この人によりて義とせらるる事を。40然れば汝ら心せよ、恐らくは預言者たちの書に云いたること来らん。41曰く「あなどる者よ、なんじら視よ、驚け、亡びよ、われ汝らの日に一つの事を行わん。これを汝らに具に告ぐる者ありとも信ぜざるほどの事なり」……

44次の安息日には神の言を聴かんとて殆ど町こぞりて集まりたり。45然どユダヤ人はその群衆を見て嫉に満たされ、パウロの語ることに言い逆いて罵れり。46パウロとバルナバとは臆せずして言う『神の言を先ず汝らに語るべかりしを、汝等これを斥けて己を永遠の生命に相応しからぬ者と自ら定むるによりて、視よ、我ら転じて異邦人に向かわん。47それ主はかく我らに命じ給えり。曰く「われ汝を立てて異邦人の光とせり。地の極にまで救いとならしめん為なり」』48異邦人は之を聴きて喜び、主の言をあがめ、又とこしえの生命に定められたる者はみな信じ、49主の言この地にあまねく弘りたり。50然るにユダヤ人ら、敬虔なる貴女たち及び町の重立ちたる人々を唆かして、パウロとバルナバとに迫害をくわえ、遂に彼らを其の境より逐い出だせり。51二人は彼らに対いて足の塵をはらい、イコニオムに往く。52弟子たちは喜悦と聖霊とにて満たされ居たり。

【使徒14】

1二人はイコニオムにて相共にユダヤ人の会堂に入りて語りたれば、之に由りてユダヤ人およびギリシヤ人あまた信じたり。2然るに従わぬユダヤ人ら異邦人を唆し、兄弟たちに対して悪意を懐かしむ。3二人は久しく留まり、主によりて臆せずして語り、主は彼らの手により、徴と不思議とを行いて恵みの御言を証したもう。4ここに町の人々、相分かれて或者はユダヤ人に党し、或者は使徒たちに党せり。5異邦人、ユダヤ人および其の司ら相共に使徒た

ちを辱しめ、石にて撃たんと企てしに、6彼ら悟りてルカオニヤの町なるルステラ、デルベ及びその辺の地にのがれ、7彼処にて福音を宣伝う。

8ルステラに足弱き人ありて坐しいたり、生まれながらの跛者にてかつて歩みたる事なし。9この人パウロの語るを聴きいたるが、パウロ之に目をとめ、救わるべき信仰あるを見て、10大声に『なんじの足にて真直に起て』と言いたれば、かれ躍り上りて歩めり。11群衆、パウロの為ししことを見て声を揚げ、ルカオニヤの国語にて『神たち人の形をかりて我らに降り給えり』と言い、12バルナバをゼウスと称え、パウロを宗と語る人なる故にヘルメスと称う。13而して町の外なるゼウスの宮の祭司、数匹の牛と花飾とを門の前に携えきたりて群衆とともに犠牲を献げんとせり。14使徒たち、即ちバルナバとパウロと之を聞きて己が衣をさき群衆のなかに馳せ入り、15呼ばわりて言う『人々よ、なんぞかかる事をなすか、我らも汝らと同じ情を有てる人なり、汝らに福音を宣べてかかる虚しき者より離れ、天と地と海とその中にある有らゆる物とを造り給いし活ける神に帰らしめんと為るなり。16過ぎし時代には神、すべての国人の己が道々を歩むに任せ給いしかど、17また自己を証し給わざりし事なし。即ち善き事をなし、天より雨を賜い、豊穣の時をあたえ、食物と歓喜とをもて汝らの心を満ち足らわせ給いしなり』18斯く言いて辛うじて群衆の己らに犠牲を献げんとするを止めたり。

19然るに数人のユダヤ人、アンテオケ及びイコニオムより来り、群衆を勧め、而してパウロを石にて撃ち、既に死にたりと思いて町の外に曳き出せり。20弟子たち之を立ち囲みいたるに、パウロ起きて町に入る。明くる日バルナバと共にデルベに出で往き、21その町に福音を宣伝え、多くの人を弟子として後、ルステラ、イコニオム、アンテオケに還り、22弟子たちの心を堅うし信仰に止まらんことを勧め、また我らが多くの艱難を歴て神の国に入るべきことを教う。23また教会毎に長老をえらび、断食して祈り、弟子たちを其の信ずる所の主に委ぬ。24斯てピシデヤを経てパンフリヤに到り、25ペルガにて御言を語りて後アタリヤに下り、26彼処より船出して、その成し果てたる務のために神の恵みに委ねられし処なるアンテオケに往けり。27既に到りて教会の人々を集めたれば、神が己らと偕に在して成し給いし凡てのこと並びに信仰の門を異邦人にひらき給いしことを述ぶ。28斯て久しく留まりて弟子たちと偕にいたり。

【使徒15】

1或る人々ユダヤより下りて兄弟たちに『なんじらモーセの例に遵いて割礼を受けずば救わるるを得ず』と教う。2ここに彼らとパウロ及びバルナバ

との間に、大いなる紛争と議論と起こりたれば、兄弟たちはパウロ、バルナバ及びその中の数人をエルサレムに上らせ、此の問題につきて使徒・長老たちに問わしめんと定む。3かれら教会の人々に見送られてピニケ及びサマリヤを経、異邦人の改宗せしことを具に告げて、凡ての兄弟に大いなる喜悦を得させたり。4エルサレムに到り、教会と使徒と長老とに迎えられ、神が己らと偕に在して為し給いし凡ての事を述べたるに、5信者となりたるパリサイ派の或る人々立ちて『異邦人にも割礼を施し、モーセの律法を守ることを命ぜざる可からず』と言う。

6ここに使徒・長老たち此の事につきて協議せんとて集まる。7多くの議論ありし後、ペテロ起ちて言う『兄弟たちよ、汝らの知るごとく、久しき前に神は、なんじらの中より我を選び、わが口より異邦人に福音の言を聞かせ、之を信ぜしめんとし給えり。8人の心を知りたもう神は、我らと同じく、彼等にも聖霊を与えて証をなし、9かつ信仰によりて彼らの心をきよめ、我らと彼らとの間に隔を置き給わざりき。10然るに何ぞ神を試みて弟子たちの頸に我らの先祖も我らも負い能わざりし軛をかけんとするか。11然らず、我らの救わるるも彼らと均しく主イエスの恩恵に由ることを我らは信ず』

12ここに会衆みな黙して、バルナバとパウロとの己等によりて神が異邦人のうちに為し給いし多くの徴と不思議とを述ぶるを聴く。13彼らの語り終えし後、ヤコブ答えて言う『兄弟たちよ、我に聴け、……28聖霊と我らとは左の肝要なるものの他に何をも汝らに負わせぬを可しとするなり。29即ち偶像に献げたる物と血と絞殺したる物と淫行とを避くべき事なり、汝等これを慎まば善し。なんじら健やかなれ』

●聖霊の加護

ピシデヤのアンテオケにある教会は最初にできた教会です。「ディアスポラ・ユーデン」、「離散したユダヤ人」の改宗した連中、それから異邦人、それが混成してアンテオケの教会が形成されている。バルナバというのはキプロス島生まれの人ですが、この中心であるわけです。12章から13章です。

25**バルナバ、サウロはその職務を果たし、マルコと称うるヨハネを伴いてエルサレムより帰れり。**

13章です

1**アンテオケの教会にバルナバ、ニゲルと称うるシメオン、クレネ人ルキオ、国守ヘロデの乳兄弟マナエン及びサウロなどいう預言者と教師とあり。**

「預言者」といっても昔のような預言者とは違う。

2彼らが主に事え断食したるとき聖霊いい給う『わが召して行わせんとする業のためにバルナバとサウロとを選び別て』

何か重大な時には、自然に断食するわけです。聖霊を深く受ける時には、自然に断食するという気持にもなる。

「断食しなくてはならない」

という律法になってはいかん。

3ここに彼ら断食し、祈りて二人の上に手を按きて往かしむ。

もちろん、聖霊の按手です。バルナバもサウロも聖霊のないひとではないけれども、非常に深く聖霊の加護を受けて出かけた。

4この二人、聖霊に遣されてセルキヤに下り、かしこより船にてクプロに渡り、5サラミスに著きてユダヤ人の諸会堂にて神の言を宣べ伝え、またヨハネを助人として伴う。6遍くこの島を経行きてパポスに到り、バルイエスというユダヤ人にて偽預言者たる魔術者に遇う。

バルとは「の子」という意味で、「バルイエス」とは「イエスの子」という名です。だから、名前でもって惑わされたら大変なことになる。

7彼は地方総督なる慧き人セルギオ・パウロと偕にありき。総督はバルナバとサウロとを招き神の言を聴かんとしたるに、8かの魔術者エルマ（この名を称けば魔術者）二人に敵対して総督を信仰の道より離れしめんとせり。9サウロ又の名はパウロ、聖霊に満たされ、彼に目を注めて言う、

この辺から「パウロ」と呼ばれる。「サウロ」はヘブライ的な名前で、「パウロ」はギリシア的な名前です。

何か事に臨むときには、グッと祈る。何も言葉で祈らなくたっていい。祈りの態勢に入る。即ち、キリストの中に自分を入れる。そこが即ち、

「聖霊に満たされる」

ということです。すぐ入れますよ。

「それができなかったらまだ本ものではない」

と言ったら悪いけれども。

「なかなか、スランプで困った」

なんて、スランプの時が一番いい。構えてはいけませんよ、構えては。棄ててかからないと。何でも、捨身は大事なんです。棄て所がある。キリストの中に棄てる。路傍に棄てるのではない。キリストの中に捨身すれば聖霊に満たされる。捨身することと、

「主よ！」

と呼ぶことが即している世界です。

●御霊の権威

10『**ああ有らゆる詭計と奸悪とにて満ちたる者、悪魔の子、すべての義の敵よ、なんじ主の直き道を曲げて止まぬか、**

パウロは私心が無くなっていますから、そうすると、相手の本質が見えるわけだ、そういった「詭計と奸悪とにて満ちた」ことが。大体、人の心は眼を見れば分かるというけれども、眼で大体直観できるわけです。眼は心の窓ですから。

11**視よ、いま主の御手なんじの上にあり、なんじ盲目となりて暫く日を見ざるべし』かくてたちどころに蒙と闇と、その目を掩いたれば、探り回りて導きくるる者を求む。**

パウロがこういうと直ちに眼が盲してしまったわけだ。パウロの言葉はキリストの御霊の権威をもっているから、すぐそこに現ずるわけです。使徒行伝を見ると、こういうような「即」の事態が劇的に展開している。時々、大いに使徒行伝に親しんでください。そして、読みながらその世界に、パウロと共にペテロと共に入る。そうしたらもう、坐っていて、あなた方はたまらなくなるから。キリストの霊はどのようなものよりも強い。キリストに全托していくと、キリストが働いてくださる。だから、恐いものはない。

「主さま！」

と本当に叫びかかって祈るときには、これは何よりも強い。悪霊の親玉のサタンをやっつけたキリストですから。昔からクリスチャンは何か弱々しいが、冗談じゃない。本当の弱さに徹しているから、本当に強いんだ。

かくてたちどころに蒙と闇と、その目を掩いたれば、探り回りて導きくるる者を求む。

これは霊の法則の世界です。奇蹟でも何でもない。聖書に奇蹟はない。

「不思議」

と書いてある。それは、人間の側からは不思議に分からない。けれども、神さまの世界、聖霊の世界にいくと、霊の法則がある。神の御意が働いている。パウロは完全に聖霊の人となって、その働きはもうはっきりしている。悪霊との戦いが既に始まっている。

「空中を司るところの権」

というのはそれなんです。

「血肉と戦うにあらず、霊と戦うのである」

という。

12**ここに総督この有りし事を見て、主の教えに驚きて信じたり。**

13**さてパウロ及び之に伴う人々、パポスより船出してパンフリヤのペルガに到り、ヨハネは離れてエルサレムに帰れり。**14**彼らはペルガより進み往きてピシデヤのアンテオケに到り、安息日に会堂に入りて坐せり。**15**律法およ**

び預言者の書の朗読ありしのち

「律法および預言者」とは旧約聖書のことです。キリストもそういう言い方をしている。

「トーラー・ウー・ネビィーム」

という。もう一つ

「諸書」「ケスビィーム」

というのがある。詩篇やヨブ記やなんかをみな入れる。普通は「律法と預言者」という。特に、預言者の方が多いのではないかと思いますが、しかし、元になっているのは「律法」というわけです。旧約聖書の性質からいえば、律法の中にたくさん預言的なものが入っていますけれども。

会堂司たち人を彼らに遣し『兄弟たちよ、もし民に勧の言あらば言え』と言わしめたれば、16パウロ起ちて手を揺して言う、

『イスラエルの人々および神を畏るる者よ、聴け。

自然に出てくるところのジェスチャーです。そこで、パウロが17節から41節まで、滔々と旧約の歴史の演説をしてしまった。これはちょうどステパノが大祭司の前で演説したのと――ステパノの方が詳しいですが――似たような内容です。ステパノが言った時にはいきりたったパウロが、今度はステパノと同じようなことを言いだした。7章から書いてあるでしょ。

「2**ステパノ言う『兄弟たち親たちよ、聴け、……**

と言って、アブラハムからずっと説きおこしている。7章全部。そして、終りの方で、

51**項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆らう、……」（使徒7・2…51）**

と言った。

●神・キリストの熱心

パリサイの中でも、パウロの先生であったところのガマリエルというのは偉いやつだった。

「33**かれら之をききて怒りに満ち、使徒たちを殺さんと思えり。34然るにパリサイ人にて凡ての民に尊ばるる教法学者ガマリエルと云うもの、議会の中に立ち、命じて使徒たちを暫く外に出ださしめ、議員らに向かいて言う、……38然れば今なんじらに言う、この人々より離れて、その為すに任せよ。若しその企画その所作、人より出でたらんには自ら壊れん。39もし神より出でたらんには彼らを壊ること能わず、恐らくは汝ら神に敵する者とならん』。」（使徒5・33…39）**

正にそのとおり。「恐らく」どころではない。パウロは正に「神に敵する者」となってい

た。ペテロ、ヨハネは完全にキリストから出ていますから、これは破るわけにはいかない。人間的ないろんな情熱とか、「神に対する熱心」とかは、それはダメなんだ。ところが、パウロのは神に対する熱心であった。これは人から出ている。それはどんなに熱心であっても、ダメなんです。だから、キリストがそれをひっくり返して、

「神に於ける熱心」

に切替えさせた「対する」と「於ける」とは大違いです。対する熱心は自我が立っている。これは人から出ている。人の熱情なんてものはダメなんだ。これは破れてしまう、行き詰まってしまう、くたびれてしまう。ところが、

「神に於ける、キリストに於ける、聖霊に於ける熱心」

はいよいよ凄くなっていく。同じ熱心でも質が違う、次元が違う、方向が違う。これはあなた方の信仰の中ではっきりしてもらわなくては。

「あの人は信仰が熱心だ」

なんて、人間的な熱情でやったら、必ずくたびれてしまう。初めはいいんだよ、非常に熱心なんだ。言っていることもなかなか確かだし、間違っていない。答案は満点に近い。けれども、段々、下向きの放物線になってしまう。しまいに、くたびれてしまう。

ところが、我々は自分の熱心なんてものは棄ててかかっている。そうすると、

「神・キリストの熱心」

がやってくる。カーブが違う。上に向かっていく放物線なんです。歳をとればとるほど凄いことになっていく。私みたいに永遠の青年になる。けれども、永遠の青年なんていって威張ってたって、肉体的にはダメだよな。ダメだけれども、

「内なる人は日々新たなり、外なる人は破るれども」

というわけです。

ガマリエルはパリサイでも、しかし、これはクリスチャンに近いパリサイです。パウロがひっくり返った後で、ガマリエルもひっくり返ったことが、どこかに書いてあれば面白いんだけれども、そこまではいかなかった。

●絶信の信

「ハッシディーム」

という、ユダヤ人の中でも霊的な中心になるところの連中がありますが、あの「ハッシディーム」というのはもともと「ヘセッド」「恵み」という言葉から来ている。

「神の恵みを受けた者たち」

ということです。恵信一如、恵と信仰が一如です。本当に恵みが根底になっている信仰というのは分かる。けれども、信仰ばかりが表にたって、恵みがどこかへいってしまったような信仰は、プロテスタントがヘタするとそうなんだ。

「信仰によって義とされる」
なんていって、「信仰、信仰」と言っている。
「信仰のみの信仰」
なんて。「信仰」がサムシングに、何ものかに、知らない間になっている。キリストの、
「汝の信仰、汝を救えり」
という言に躓いている。これは躓きの言です。
「汝の信仰が汝を救った」
というのは、
「お前がかくも神・キリストを、私を本当に受けとってくれたこと、これが救いとなったんだよ」
ということです。汝の信念でも何でもない。だから、私は絶信の信という。
「自分の信仰すら問題とするな」
と。「自分の」という我が無くなってしまうわけです。まるで空気みたいなんです。けれどもそこは、
「無即無限無量」
という、もの凄い世界です。ガマリエルは、
「彼らが本当に神さまから出ていたら、どうにもならん」
と言った。
皆さん、それだけの本当の自信ならざる自信を持たなかったら、信仰をやめたらいいよ。表現というものは逆説的だから、
「信仰をやめたらいい」
と私が言うと、
「先生は信仰をやめることを言って、何を言っているか」
なんて思う。それは逆説的な言い方になっている。そういうような、こだわった、何か自己がまだかかっているような信仰なら、やめたらいい。私が、躓いても転んでも滑っても倒れても前進してやまないのは、ここにあるからです。私は人に何と言われたって一向差し支えない。
「キリストを見ろ、わがうちなるキリストを見ろ」
と言って進んで行きます。だから、
「我にとりて、生くるはキリスト」
なんです。キリストの他に、わが内なるキリストの他に、生命はないのだから。
パウロというのは本当に大変なやつです。それはパウロが大変なのではない、キリストが大変なひとなんです。
「お前たちは私よりも大いなる業（わざ）をなす」

とおっしゃった。キリストはパウロを捕まえて、パウロを通して大いなる業を続けておられた。十字架に架かったあと、天界から今度はパウロを捕まえて、世界伝道は、パウロを通してキリストが活躍しているんです。これはまた、

「君たちを通して、世の末までも地の極までも」

ということです。もう、20世紀はどんなことになるか分からない。けれども、どんなことになろうとも、絶対不敗である。絶対不敗ということが本当に言えるためには、いわゆる

「自分の信仰」

なんて言っているうちは、絶対不敗なんて言えません。

「敵は幾万ありとても」

なんていう歌があるが、

「百万人といえども我ゆかん」

と孔子が言った。我々はそれがはっきり言える。

●一極絶対

「強者は独りある時に最も強い」

と、シラーが『ウィルヘルムテル』の劇の中で言っている。あなた方は、乙女といえども、最も強くあり得る。ジャンヌダルクをみてください。ジャンヌダルクがイギリスの軍隊をあれだけやっつけてしまったではないですか。彼女は本当に霊に加持されて動いていた。何も、

「喧嘩をしろ」

というのではない。一番強いのは敵をも救いあげる力です。この聖霊というのは敵をも救いあげる力だから、敵がいないわけですよ。

聖霊とは一体何だと思っているんだろうな、みんな。

「何か聖き霊だから、とても私みたなやつはどうにもならない」

なんて思う。聖霊はなぜ降臨してきたか。聖霊はもの凄い愛の霊ですから。生かしてやまない霊、救ってやまない霊です。だから、降臨してきたんです。どんな所にでも入ってくる。キリストが相手にしたのは、皆にけなされているような、つまはじきにされているような、また、目の見えない人とか、そういうような人たちを相手にして、天国を築いて行った。どんなに立派なものでも、どんなに善いものでも、みんな賜ったものであるのに、私しているからダメだ。そんな者たちはちっとも伸びていかない。

人をうらやむことは一つも要らん。素晴らしいのはキリストだけです。

「一極絶対」

と私が言ったのはそのことなんです。キリストという一極は絶対の極だから。そして、あなた方一人一人を対極になさる。

ただ「コイノニヤ」だとか、「エクレシア」だとか言って、衆を頼むようなことではダメです。本当に「一」が世界を動かす。この「一」が世界をしょっているんです。あなた方一人一人がそれだけの重さを持っている。

「ひと一人の魂は全世界とも比べることができない」

とキリストが言ったではないですか。

「どうも、私はまだ信仰が…」

とか、

「私はまだ身体が…」

とか、

「私は頭が悪いから…」

とか、そんなことはみんな要らん。全存在をキリストにぶちまければいい。そうしたら、人の思いにはるかに越えたところの事がその人を通して動いていく。

使徒行伝のパウロは、どんな艱難にも全くそのようにして動いています。今の世の中はどうですか。すぐ、ストライキ、賃金闘争、そんなことばっかりだ。経済問題が最大の問題と思っている。みんな、もっと乏しきに徹したらいいではないですか。お互いに本当に助け合う気持でやったならば、物価なんかすぐ安定してしまう。

だから、すべての問題は心の問題に帰する。心の問題は宗教の問題に結晶する。万人は宗教人であることを自覚しなければどうにもならん。政治に動かされているようなことではダメです。単なる教育でもない。だから、この福音を賜っているあなた方が本当の教育者なんだ。この福音を持っている人は、本当の政治を動かすところの人なんだ。それだけの自信と、神の国建設ののっぴきならない一人としての自覚を持っていただきたい。

●世は非常時

もう、本当の意味で、世は非常時ですよ。日本は非常時にある。かつて、戦争の時に「非常時」という言葉があった。あのような非常時よりか今の方が質的にもっと非常時なんだ。日本はみずから滅びていく非常時だ。外国の原爆が恐いのではない。

日本人一人一人が、

「光は東方より」

の光を帯びた、太陽が国旗であるような、本当の太陽人となる。そのようにしてやってごらんよ。世界は日本に対して本当の尊敬を払うことになってくるから。これはいかに望んでも空望だな。仕方がない。人に望むことは要らん。あなた方、我々一人一人が、そこに徹して、

「生くるも死ぬるも、キリストである」

と、一点張りでいくよりか仕方がない。

日本の教育界は、こんなことでは小学校から大学に至るまでダメです、いくら制度を変えたって。

パウロが、

「はらからの為には自分は棄てられてもいいんだ」

と言ったではないですか。どれほどパウロは自分が間違っていたか。そして、この自分の間違いを同じようにしているご連中を、何とかして自分と同じように回心させたいと言って、パウロは本当に伝道した。せっかくよくなったと思ったら、ガラテヤの連中がまた巻き返しをくらって、ユダヤ教に変わったから、そこで『ガラテヤ書』を書いたんです。

そういうわけで、ガマリエルも素晴らしかったけれども、

「神から出ること」

のいかに大事なことを知っていたけれども、彼自身が本当にキリストから出るところまでは、恐らくこなかったでしょう。そこはガマリルも残念だった。

パウロも、自分ではとてもそこにいけなかった。キリストに、

「これはしょうがない野郎だ、何事だ！」

と、突き飛ばされてひっくり返された。そこで、パウロは参った。パウロのバプテスマというのは生易しいバプテスマではない。

●霊的根源現実

もう、居ても立ってもいられないようなエネルギーといいますか何といいますか、そういったものがあなた方の中に今、ぼつぼつとしていますか。

30 **されど神は彼を死人の中より甦（よみが）えらせ給えり。**

パウロは書簡の中で、

「キリストが死人のうちより甦えらせられた」

ということを何回言っているか。そして、この演説の終りの方に、特に「朽腐（くされ）」という言葉を三回も言っている。

36 **それダビデは、その代にて神の御旨を行い、終に眠りて先祖たちと共に置かれ、かつ朽腐（くされ）に帰したり。**

ダビデの肉体はそのまま滅びてしまった。

37 **然ど神の甦えらせ給いし者は朽腐（くされ）に帰せざりき。** 38 **この故に兄弟たちよ、汝ら知れ、この人によりて罪の赦しのなんじらに伝えらるることを。**

罪に勝ったひとです。

「罪の価は死である」

という、この罪に勝って、死に勝ったキリストは腐れにこない。これほど当然なことはない。これが腐れにきたら、神さまの創造はだいなしだ。キリストは、その肉体は霊化してしま

った。

「元の肉体に返った」

ということではない。キリストが地上にあった肉体は、我々と同じ危機性をもった肉体です。それが霊化してしまって、もはや腐れに帰さないところの霊体に変質してしまったわけです。だから、自在なんです。

これは科学でいくらやったって、とてもダメだよ。この頃の人は、科学万能みたいな感覚を持っているね。

「科学的実証のないものはダメだ」

なんて、冗談じゃない。その限界をはっきり言ったのはカントです。認識の限界の外がある。いわゆる知情意ではどうにもならん。霊的法則の霊的実体の世界です。

この宇宙を――私は分からんけれども――電磁気、また霊気が漂っているわけです。これを「天地正大の気」なんて、藤田東湖が詩的な表現で言ったけれども。

「6**もろのろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の気（いき）によりてつくられたり**」（**詩篇33・6**）

「よろずのものは神の気によって成った」

とある。そういう

「ガイスト」「プニューマ」「ルーアッハ」

という「気」の世界、「霊」の世界、これが生命的な世界の一番実質なんだ。これほど素晴らしい実質はない。それは我々には認識はできない。けれども、それを有つことは、連なることはできる。だから、キリストというような方は、本当にそれを有って、それを受けとって、神と一体になった。

「我を見し者は父を見しなり」

といって、神と一体となっている驚くべき事態です。キリストが福音書で、また使徒たちが使徒行伝で、現じていった事態。あれは霊の現象ですけれども――現象をただ言っているわけではない――あのような現象が起きる本当の奥の霊の現実、根源現実、霊的根源現実の世界に、ここに全存在をいれる。これが本当の信仰なんです。

「我れキリストを信ず」

というのは、そのようなキリストを根源で受けとっているということです。だから、これは限りなく深くなっていく。これでいいなんていう所はない。満たされていよいよ求める世界です。キリストの方は、

「いくらでもやるぞ」

という。そうしてくると本当に、

「私は死んでも死なないなぁ」

という、或る超自覚がきます。いわゆる自覚ではない。自覚を越えたところのものです。

これは本当にありがたい。そういうようなのがこのキリストの復活の生命なんです。本当は、復活なんていう言葉は当たらない。ですから、全存在が渾然（こんぜん）としたら、それは肉体にも必ず作用する。救は霊肉渾然たる救いなんです。魂だけではない。地上でたとえ目が見えなくても、決して失望することはない。天界にいけばもっと素晴らしく一番見える人になる。これはイザヤ書35章に約束されているとおりです。イザヤ書35章というのは素晴らしい。34章は地獄で、35章は天国です。

●万人救済

聖書に食いついてくださいよ。聖書を読むことが直ちにその現実であり、直ちに祈りであり、直ちに讃美である。

私はこないだ高等学校で全校生徒に言った。

「私はなぜ元気があるか、はっきり言うよ。私は霊界から力が来ているんだから」

と。時々はっきり言わないとダメだから。とにかく、彼らは今は分からなくても、水を割らずにはっきり言っておく。そうすると、あとで

「ああ、やっぱり、その通りだ」

ということになる。キリストは水を割らずに言う。そうすると、それがきっかけになって、いつか目が覚める時がくる。ある時は、その次元に下りてものを言うことも必要です。けれども、ある時ははっきり次元の違ったところをバーッと言っておくことが必要です。真理というものは千変万化の現れ方をする。

そういうわけで、パウロがキリストの甦りのことをさんざん言っている。

38 **この故に兄弟たちよ、汝ら知れ、この人によりて罪の赦しのなんじらに伝えらるることを。**

パウロの話は全部告白です。

「私自身がそうだった。私は許された。こんなとんでもない者が」

と。だから、パウロは

「私は罪びとの首（かしら）だ」

と言ったではないですか。

「こんな一番悪い者がこうやって救われたのだから、あなた方は救われないことはひとつもない」

と、内村先生もそう言った。

「私が救われたのだから、万人救済を私は信ずる」

と。戦場ケ原の内村先生のあの一文は非常に素晴らしい文章です。

ところがどっこい、パウロが罪びとの首ではなかった。キリスト自身が罪びとの首となった。これが十字架です。パウロはいくら十字架に架かったって、人を贖うわけにいかない。

罪無きキリストが十字架に架かって、罪びとの首、極悪人を自ら受けとった。

「お前たちの罪は全部、ここでもって御破算にしてしまったよ」

と。この十字架に来たら、人間の世界で、心の問題で解決しないことは一つもない。一つの例外もゆるさん。そうしたら、もう自我からすっ飛ばされた。自我が罪なんだから。

「私が、私が」

というのが罪なんだ。パウロなんて、その最たるものだった。

「私はもう、律法を全うした」

なんて思って、

「律法の義につきては責むべきところなし」

なんて威張りくさっていた。この「私」というやつが、どんなに内容が立派であっても、この「私」が立っている限りは、これが「罪」なんです。これが肉なんです――パウロが霊・肉とはっきり分けて言っているのは――これを肉と言った。「霊」とはキリスト中心のこと、「肉」とは我中心のことです。

●南無キリスト

全ての罪をゆるし、すべての病を癒すキリストである。

「まだ癒えないではないですか、じれったいな」

なんて、地上で癒えなくても、現象的に癒えなくても、根源的には癒えているんです。どんなにベッドに蒲鉾みたいに取り付けられてしまって、動けないような病人でも、奇病の人でも、キリストを受けとっている人は、根源的にこれは既に健康者なんです。凱歌を上げて地上を去っていくことができる。人間のいわゆる健康なんて大したことではない。どうせ、そのうちにみんな向こう側ですよ。その向こう側が、地獄の向こう側では困るよ、上の方の向こう側でないと。上の方の向こう側にいくためには、地上において既に向こう側を受けとって、此岸（しがん）を彼岸（ひがん）としていなくてはいかん。既に彼岸人、天国人である。

「国籍は天にあり」

という。天国はこの地上に、

「お前たちの間に天国が、お前たちの中に天国があるではないか」

とキリストが言われた。

「既に、死んでも死なない人になっているではないか」

と、キリストは実力をもっておっしゃっている。それを本当に受けとってくださいよ。そうしたら、現象面も変わってきますから。

39 汝らモーセの律法によりて義とせられ得ざりし凡ての事も、信ずる者は皆
この人によりて義とせらるる事を。40 然れば汝ら心せよ、恐らくは預言者た
ちの書に云いたること来らん。

全的にキリストの中に投入することです。キリストの中に信入する。

「南無キリスト」

これは帰入です。

「南無阿弥陀仏」

と言ったって構わない。「アミッター」というのは「無量寿無量光」だから、無量寿無量光なるものはキリストではないですか。「無量寿無量光なる覚者」キリストの中に「南無」、帰入することを「南無阿弥陀仏」と言う。「南無阿弥陀仏」と言うと――何といっても言葉としては仏教が先輩だから――困るから、

「南無キリスト」

でいい。「南無」とはいい言葉だ。やっぱり、法然、親鸞は偉い、日蓮さんでも。「南無妙法蓮華経」「南無阿弥陀仏」という。「南無キリスト」、これは本当に土着化したキリスト道なんです。「南無キリスト」を静かに称えて、キリストの中へ入っていく。そこには十字架が光る。

41**曰く「あなどる者よ、なんじら視よ、驚け、亡びよ、われ汝らの日に一つの事を行わん。**

「一行を行ぜん」という。

これを汝らに具（つぶさ）に告ぐる者ありとも信ぜざるほどの事なり」

これはハバクク書からもってきた言葉です。

●言い逆らいの徴

それから今度は東の方へいきます。これはパウロがピシデアのアンテオケアでもって演説をやった。

44**次の安息日には神の言を聴かんとて殆ど町こぞりて集まりたり。**

これは驚いた。もう、パウロの言葉は、言葉が言葉でない。聞いているうちに力がきてしまう。

ザビエルがそうだった。ポルトガル語で、彼がしゃべっていると、その言葉の霊的な波動でもって、聞いている人がもう信仰の世界に入ってしまう。何万という人をザビエルは信仰に入れたんだから。あれは偉い伝道者です。日本にまっ先にやってきた。

相対的判断をしているうちは、いつまでたってもダメ。これはパリサイなんです。そんなところから抜けなくては。教会であろうと、無教会であろうと、幕屋であろうと、何であろうと、一向差し支えない。問題は、

「そこに本ものがあるか」

ということだけです。問題は本ものだけです。「キリスト」の「キ」の字も知らなくても、本ものなら分かる。神さまは誰を天国に入れるか、誰も知らん。

45**然どユダヤ人はその群衆を見て嫉に満たされ、**

そうなんだ、今まで自分たちの味方だと思っていたのが敵になってしまったものだから。そして、そこに大勢集まって来たものだから、すぐ妬む。妬みの次にくるのは争い。妬み争いというやつ。女性は特に妬みが強く、男性は争いが強い。妬み争いというのは人間の心の一つの癌みたいな病菌だ。これから抜けなくてはいかん。

「ああ、結構でございます」

と。人の悦びを本当にその人になって喜び、人の悲しみを本当に一緒になって悲しむ。喜びを更に大にし、悲しみは喜びに変える。イザヤ書61章に書いてある。

パウロの語ることに言い逆いて罵れり。

パウロも「言い逆らいの徴」だからね。キリストが言い逆らいの徴です。

46**パウロとバルナバとは臆せずして言う**

聖霊がきたら、もう臆しない。恐いものはないのだから。

『神の言を先ず汝らに語るべかりしを、汝等これを斥けて己を永遠の生命に相応しからぬ者と自ら定むるによりて、視よ、我ら転じて異邦人に向かわん。

愉快な言葉だね。

「お気の毒な話ですよ、あなた方は大事なものを受けとろうとしないから。せっかく、いいものをやろうというのに、あなた方は退けるから、仕方なしにやむを得ず異邦人に来たのに、なぜ妬むか。それなら、さっさっと受けとってくれたら良かったものを」

というわけです。

47**それ主はかく我らに命じ給えり。曰く「われ汝を立てて異邦人の光とせり。地の極にまで救いとならしめん為なり」』**

イザヤ書49章6節にある言葉です。

●喜悦と聖霊

キリストはある時、言われた、

「自分はイスラエルのために遣わされたんだ」

と。ツロ・シドンの女が、

「娘を救ってください」

と言ったら、

「そっちはダメだ」

「いえ、犬ですら、食卓からこぼれるパンくずをいただきます。私はそのパンくずでもいいんです」

と言ったら、キリストは、

「**汝の信仰、汝を救えり**」
と言った。あれはキリストが正直、あの女性の信仰に負けた。
パウロは今度は異邦人にむかって行った。
48**異邦人は之を聴きて喜び、主の言をあがめ、又とこしえの生命に定められたる者はみな信じ、**49**主の言この地にあまねく弘りたり。**
もう、凄いことです。渇いた所に慈雨が降ってくるようなものだから。
50**然るにユダヤ人ら、敬虔なる貴女たち及び町の重立ちたる人々を唆かして、**
「敬虔」というのは、ここでは、ユダヤ教的な意味で神を信じていることをいいます。
パウロとバルナバとに迫害をくわえ、遂に彼らを其の境より逐い出だせり。
だから、ここはダメなんだ。そこで次の所へ移っていくわけです。いわゆる「ディアスポラ・ユーデン」（離散したユダヤ人）は受けとらないものだから、仕方がないから、アンテオケからイコニオムの方へ移っていく。
51**二人は彼らに対いて足の塵をはらい、イコニオムに往く。**
これはキリストが言われたとおり、
「**その町が受けとらなかったら、足の塵を払って出ていけ**」
と、おもしろいことを言うんだね。東京なんかたくさん塵があるから、大変だよ、塵を払うのが。
52**弟子たちは喜悦と聖霊とにて満たされ居たり。**
楽しいね、これ。キリストを通して神さまの生命がきたから、救われたから、楽しくてしょうがない。クリスチャンがくすぶってるような顔をしたらダメだよ。まぁ、顔だちはいろいろだから、くすぶったように見える人もあるけれども（笑）。
「私の中が見えませんか。喜んでいるんですよ」
と言うんだ、そういう時は。

●徴と不思議

次は14章です。
1**二人はイコニオムにて相共にユダヤ人の会堂に入りて語りたれば、之に由りてユダヤ人およびギリシヤ人あまた信じたり。**
いつも会堂に行ってしゃべる。キリストもそうです。カペルナウムのシナゴーグではキリストはよく語られた。その遺跡が今でも残っている。
2**然るに従わぬユダヤ人ら異邦人を唆し、兄弟たちに対して悪意を懐かしむ。**
3**二人は久しく留まり、主によりて臆せずして語り、主は彼らの手により、徴と不思議とを行いて恵みの御言を証したもう。**
臆せずして語る。何も臆することがない。業と言葉と両方で、手足と口と両方でもって福

音は伝えられていくわけです。あなた方は集会をしながら、魂ばかりでなくて肉体的にも強くなっているんですよ。私はあるとき、

「福音は徴（しるし）の宗教だ」

とも言いました。キリスト自身が最大の徴ですから。キリスト自身が最大の不思議ですから。キリストという徴、キリストという不思議には、

「どうにもならん」

と、降参しなければダメです。分かろうとしたって、分かるものではない。聖書を分かろうなんていって読むから、いよいよ分からなくなる。分かる世界ではないんだ。降参しなくてはいかん。降参すると、その徴と不思議が不思議に入ってくる。

キリストが湖の上を渡ってきたら、

「ああ、楽しいなぁ」

ということになる。

「**変化（へんげ）のものだ**」

なんて思わなくなる。

「いやぁ、素晴らしいなぁ」

と、そういう気持で読んでいますか。

4 **ここに町の人々、相分かれて或者はユダヤ人に党（くみ）し、或者は使徒たちに党せり。**

二つに分かれてしまう。キリストがおっしゃっているとおりです。

「51 **われ地に平和を与えんために来（きた）ると思うか。我汝らに告ぐ、然らず、反って分争なり。52 今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分かれ争わん。53 父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、姑は嫁に、嫁は姑に分かれ争わん。**」（ルカ12・51～53）

「平和でなくて紛争をもたらすために来た」

なんて、躓きのことをキリストが言う。一遍そこにガタが起きるんだ。そのガタが今度は本当のまとまりになる。そこで振るわれて、

「いや、いけない」

と思ってキリストに立ち帰れば、キリストに付いた者は、ガタガタしている者を今度は本当にまとめることができるようになってくる。それはそうですよ。キリストの力を受けとっている人の実存には、

「やっぱりかなわないな」

と思う。だから、何のかんのと言ったって、

「やっぱりあれは本ものだった」

ということになる。

「37**我よりも父または母を愛する者は、我に相応(ふさわ)しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず。**」（**マタイ10・37**）

恋人も入れたっていい。恋人は例外だと思ったら、とんでもない間違いだ。何でもかんでも全部、キリストより他に愛するものがあったら、

「**私の弟子にはなれないぞ**」

という。キリスト一点張りになると、今度は逆に、そういった人たちを全部救い上げることになる。万人に対して救いの手をのべていくことが自由自在となる。

「**弱き者には弱き者となり、頑(かたく)なな者には頑なな者となる**」

と、何とでもなる。ちょうど空気がどんなものでも包んでしまうように、空気のようになってしまう。全部包んでしまう。本当に柔軟な魂となる。道元の言った

「柔軟心」

というのは、福音を受けているひとこそ本当の柔軟心です。ところが、いわゆる

「信仰」

という人は固い、かみしも付けたようなのが多くて困る。

●「なんじの足にて真直に起て」

5**異邦人、ユダヤ人および其の司(つかさ)ら相共に使徒たちを辱(はずか)しめ、石にて撃たんと企てしに、**6**彼ら悟りてルカオニヤの町なるルステラ、デルベ及びその辺(あたり)の地にのがれ、**7**彼処にて福音を宣伝(のべつた)う。**

8**ルステラに足弱き人ありて坐しいたり、生まれながらの跛者(あしなえ)にてかつて歩みたる事なし。**

これは使徒行伝3章のペテロのときと同じだ。

9**この人パウロの語るを聴きいたるが、パウロ之に目をとめ、救わるべき信仰あるを見て、**

「目をとめ」という時には、もう、目から霊的な力が伝わっているんです。

「**救わるべき信仰あるを見て**」

とは即ち、

「拒否していない、受けとろうとしているのを見て」

ということ。福音に、キリストに渇いている心です。この渇きが大事なんです。

「**幸福なるかな、義に飢え渇く者。その人は飽くことを得ん。**」（**マタイ5・6**）

という。

「恵福なるかなキリストに飢え渇く者、その人は満たされん」

ということです。おなかが空いて御飯を食べたいという意識はすぐ出てくるくせに、魂の方の渇きはそっちのけでいる。喉が渇いた時には真清水が一番おいしい。聖霊の祈りの人

はなるたけ水を飲むといい。

魂が渇いている、受けとろうとしている。

10 **大声に『なんじの足にて真直（まっすぐ）に起（た）てて』と言いたれば、かれ躍り上りて歩めり。**

「大声に」というのが時々出ています。キリストも、

「ラザロよ、出できたれ！」

と言う時に大声で叫んだ。あれは何も、力んだ大声ではない。自然に大声にならざるを得ない。気合がかかるとそうなる。その声に霊質がある。霊的な質のない大声は、いくら大声であってもダメです。パウロがこう言う時には、言葉を発する前に、その跛者に向かって、跛者が立っている状態、癒されている状態をはっきりと見て言っているんです。

「こう言えば、癒されるだろう」

なんていう、そんな想像で叫んだって絶対にダメです。もうキリストの勝利をはっきり意識して言う。信仰とはそういうたちのものです。必然なんです。霊的必然なんです。霊的必然と自由は一つ。そういう、止むにやまれざるものが働く。

●せざるを得ずして動く

止むにやまれず、やむを得ずというのが一番本当の世界です。

「自分は福音を宣べ伝えるのは止むを得ない。止むにやまれないんだ。どうにもならんのだ」

ということ。あなた方は今、止むを得ずして、していることがある。呼吸だ。呼吸は意識していない。超意識の世界です。意志を超えた世界で、止むを得ずやっているものがある。心臓の鼓動がそうです。これはちゃんと、止むを得ずして動いている。スイスの時計はいくら素晴らしくたって、時には止まる。ところが、あなた方の心臓の時計は止まらない。止まったら、あっち側だ。

「別の具合にはできません」

ということ。

「こうしようか、ああしようか」

ではない。

「かくせざるを得ず」

ということ。福音の世界は、せざるを得ずして動いている世界です。せざるを得ずして動く世界が自由ということ。

「こうやる自由もある、ああやる自由もある」

といったような自由は、まだ本当の自由ではない。本当の自由はせざるを得ないという世界です。自由と必然が一つ。霊法が働いている世界です。凡ては法則の世界です。

「法」という字は「三水（さんずい）に去る」と書く。

「水は低きに向かって流れ去る」
のは必然である。「法」というのはそれだけの、動かすことのできない事態である。

10 **大声に『なんじの足にて真直（まっすぐ）に起（た）て』と言いたれば、かれ躍り上りて歩めり。**

と。これはペテロの時と同じだ。たちどころに立ってしまった。楽しいね、素晴らしい次元です。使徒たちの次元にはまだ適わないですよ、とても。

「祈祷会を開いて、一生懸命で大勢で祈って霊的磁場をつくって、やっと少し現象が起きてきた」

なんて、そうじゃないんだ。パウロ一人で、バッと働いてしまう。これは大変な世界です。だから、祈りを限りなく深めていくことです。

私たちには霊界にこの使徒たちが味方している。天の万軍が味方している。決して孤独ではない。キリストおよびキリストの使徒たちが味方なら、地上の奴らをみんな向こう側にまわしたって、びくともしない。本当ですよ。私はどうしてこんなことになったかね。それは聖霊だからです。あなた方もそうなんです。

「まぁ、小池先生は仕方がないけれども、私はダメだ」

なんて、そうじゃないですよ、ひとつも。私は一番の弱虫ですから。

そのようにして、踊り上がって歩みました。あなた方、

「誰かに言われなければ、自分の病気は治らない」

とか、

「自分の魂は進まない」

とか、思ってはいけませんよ。聖書一巻、この中にキリストが中心となって、きら星の如く驚くべき霊的な人物がいるではないですか。聖書はドラマだからこれに親しんでください。そして、その現実に入ってください。先生なんか一人もいりませんよ。私はあなた方にただきっかけをつくっているに過ぎない。

聖書一巻でいい。もう、一人で楽しくなって、躍りだしてしまう。

「何だ？　あれは、踊りだしたりして、ちょっと気がふれたのではないか」

なんて。

「神のためには狂えりなり」

という。しょっちゅう躍ることはないですよ。何も、「躍れ」なんて言っているのではない。心が本当に躍っている。その世界に入ると、心が天を翔けるようなことになります。そして、知らない間に――

「酒は百薬の長」

というけれども、

「聖書は百薬の長」

です、聖書はその中にどんな薬以上のものが入っているから――決してへこたれないでく

ださいよ、癌でも治るから。癌を治す薬はないというけれども、実はあるんだ、聖書の中に。キリストにくれば癌も治ってしまう。

何故、私がそう言うかというと、肉体的な癌よりもやっかいな癌は、

「人間の自我という癌」

なんだ。この自我という癌をキリストは十字架につけてしまった。そして、救いにもたらした。いわゆる肉体的な癌は、この自我の癌が抜けると、魂の癌がぬければ肉体の癌はぬけていきます。

「そうでしょうか？」

ではないですよ。もし、癌にかかったら、そこまでの信仰をもって進んで行こう。癌の核は強いらしいね。けれども、「霊核」はそれよりも強いから、これが肉体の中で動きだすと癌をやっつけるんです。按手によって癌が治った人もある。

●天地創造の神

11群衆、パウロの為ししことを見て声を揚げ、ルカオニヤの国語（くにことば）にて『神たち人の形をかりて我らに降り給えり』と言い、

パウロを見て、驚いたんだ。生まれつきの跛者が立ってしまったものだから、

「これはとんでもない者が現れた、神さまの化身が現れてきた」

と。

12バルナバをゼウスと称え、パウロを宗（むね）と語る人なる故にヘルメスと称う。

「ゼウス」というのは神々の中の一番最高の神さまだ。パウロの方がちょっと下だ、「ヘルメス」にされた。

13而して町の外なるゼウスの宮の祭司、数匹の牛と花飾とを門の前に携えきたりて群衆とともに犠牲を献げんとせり。14使徒たち、即ちバルナバとパウロと之を聞きて己が衣をさき群衆のなかに馳（は）せ入り、15呼ばわりて言う『人々よ、なんぞかかる事をなすか、我らも汝らと同じ情を有（も）てる人なり、汝らに福音を宣（の）べてかかる虚（むな）しき者より離れ、天と地と海とその中にある有らゆる物とを造り給いし活ける神に帰らしめんと為（す）るなり。

「天と地と海とその中にある有らゆる物とを造り給いし活ける神」

これは大事な言葉です。「創造の神」ということ。神はただ、天地を創造した神さまだけ。救主（すくいぬし）はキリストだけ。このことをはっきり、パウロはここでもって言った。だから、パウロの伝道は大変だよ。

「天地創造の神さまをしっかり拝んでくれ」

と。ゲーテという人は、自然において神さまの働きを本当に見ていたひとです。神と自然とを、ある時はほとんど分けることのできないくらいに、自然の中において神を見ていた。

だから、

「自然を利用して勝手気儘にやっていると、今に人類は困ることになるぞ」

と、予言していた。そのとおりになってしまった。

「自然をもっと尊び、尊重し、親しむということでなくてはいかん」

と言った。ゲーテという人は大きな魂です。

15節は、

「天地を創造されたところの活きている神さまにお前たちが本当に帰入せんがためである」

ということです。

16過ぎし時代には神、すべての国人（くにびと）の己が道々を歩むに任せ給いしかど、17また自己を証し給わざりし事なし。即ち善き事をなし、天より雨を賜い、豊穣（みのり）の時をあたえ、食物と歓喜（よろこび）とをもて汝らの心を満ち足らわせ給いしなり』

「そういう自然の恵みというものはみな神さまから来ているんだ」

と、分かりやすく言ったわけです。その通りです。天地創造の神さまの恵みのことを言って、

「もう、そんな偶像崇拝は止めたらいいだろう。神さまは人が造った宮の中に住んでいるのではない」

と。

●艱難を歴て神の国に

18斯く言いて辛うじて群衆の己らに犠牲（いけにえ）を献げんとするを止（とど）めたり。19然るに数人のユダヤ人、アンテオケ及びイコニオムより来り、群衆を勧（すす）め、而してパウロを石にて撃ち、既に死にたりと思いて町の外に曳（ひ）き出せり。

悪いやつが来た。昔も今も暴徒がいるね。ひどいめにあった。パウロは死んだかと思ったが、「どっこい」というわけだ。

20弟子たち之を立囲みいたるに、パウロ起きて町に入る。明くる日バルナバと共にデルベに出で往き、21その町に福音を宣伝（のべつた）え、多くの人を弟子として後、ルステラ、イコニオム、アンテオケに還（かえ）り、

即刻に弟子ができるというのは、なんと力強い言葉と徴が行われていったか。人間の魂はごまかしがきかないから、本ものにでっくわすと、何か打たれるんです。ウソものは、どんなにしゃべったってダメ。本ものだと、何か響きが違う。魂の世界はごまかしがきかない。

22弟子たちの心を堅うし信仰に止（とど）まらんことを勧め、また我らが多くの艱難（かんなん）を歴（へ）て神の国に入るべきことを教う。

「そうしなければ、神の国に入ることができない。そうしてこそ、神の国に入らざるを得ない」

ということ。この「べき」も非常に強い「べき」です。

23また教会毎に長老をえらび、断食して祈り、弟子たちを其の信ずる所の主に委ぬ。

この辺から、パウロは或る教会の形を造っていった。「長老」を一番先につくった。「プレスビテリアン」というでしょ。歳をとった中心となる人です。それは別に役職でも何でもない。ひとつのグループとしての――いわゆる制度化した意味ではなく――有機体的な構造として、自ずからそういうものを置いたということです。それが後で制度化されてしまったから、そこにまた教会の弊害がおきてきた。

24斯(かく)てピシデヤを経てパンフリヤに到り、25ペルガにて御言を語りて後アタリヤに下り、26彼処より船出して、その成し果てたる務(つとめ)のために神の恵みに委ねられし処なるアンテオケに往けり。27既に到りて教会の人々を集めたれば、神が己らと偕に在(いま)して成し給いし凡てのこと並びに信仰の門を異邦人にひらき給いしことを述ぶ。28斯て久しく留まりて弟子たちと偕にいたり。

全部今までの伝道の経験を述べたということです。伝道報告をした。

パウロは救われて最初の伝道をこのようにしてやったわけです。年号は大体、47年3月あたりにアンテオケから出発して、ベルガに着いたのは48年、そしてここに戻って来たのが49年の夏頃ではないかと言われています。2年間位かかっている。相当の月日を要している。

●福音か割礼か

第一回伝道は一応そこで終わるわけです。15章はエルサレムに於ける会議のことで、これは多分49年の冬から50年にかけてのことです。

1或る人々ユダヤより下りて兄弟たちに『なんじらモーセの例に遵(したが)いて割礼を受けずば救わるるを得ず』と教う。

パウロは

「割礼なんか要らん」

というわけです。キリストの福音があれば割礼なんか問題ではないと。ところが、ユダヤ人の方では相変わらず割礼を問題にしている。

2ここに彼らとパウロ及びバルナバとの間に、大いなる紛争と議論と起こりたれば、兄弟たちはパウロ、バルナバ及びその中の数人をエルサレムに上らせ、此の問題につきて使徒・長老たちに問わしめんと定む。3かれら教会の人々に見送られてピニケ及びサマリヤを経、異邦人の改宗せしことを具(つぶさ)に告げて、凡ての兄弟に大いなる喜悦(よろこび)を得させたり。4エルサレムに到り、教会と使徒と長老とに迎えられ、神が己らと偕に在(いま)して為し給いし凡ての事を述べたる

に、5信者となりたるパリサイ派の或る人々立ちて『異邦人にも割礼を施し、モーセの律法を守ることを命ぜざる可(べ)からず』と言う。

即ち、福音を或る意味においては認めながら、相変わらず旧約の角度にこだわっている。使徒たちもまだ――ペテロはよほどよくなっているけれども、それでもパウロまで徹底してない――割礼のことがどうしても引っ掛かりになってしまった。救いの絶対必要条件はキリストを受けとる信仰だけなんだ。だから、このパウロの立場と違うわけです。

6ここに使徒・長老たち此の事につきて協議せんとて集まる。7多くの議論ありし後、ペテロ起(た)ちて言う

ペテロは大分いいです。ペテロはなんと言ったって、第一の弟子だからね。

『兄弟たちよ、汝らの知るごとく、久しき前に神は、なんじらの中より我を選び、わが口より異邦人に福音の言を聞かせ、之を信ぜしめんとし給えり。8人の心を知りたもう神は、我らと同じく、彼等にも聖霊を与えて証をなし、9かつ信仰によりて彼らの心をきよめ、我らと彼らとの間に隔(へだて)を置き給わざりき。10然るに何ぞ神を試みて弟子たちの頸(くび)に我らの先祖も我らも負い能わざりし軛(くびき)をかけんとするか。11然らず、我らの救わるるも彼らと均(ひと)しく主イエスの恩恵(めぐみ)に由ることを我らは信ず』

ここではっきり、ペテロは「恵みによる」ということを言いました。このペテロのこの言葉は非常に大事な言葉です。この場合、ペテロは「信仰により」と言わない。即ち、

「キリストの恵み、キリストの救いによったのだ」

と言った。

12ここに会衆みな黙して、バルナバとパウロとの己等によりて神が異邦人のうちに為し給いし多くの徴と不思議とを述ぶるを聴く。

ペテロは本当の意味においてパウロとバルナバを認めたからね。

13彼らの語り終えし後、ヤコブ答えて言う『兄弟たちよ、我に聴け、

云々と。そして、お互いに認めることになって、

28聖霊と我らとは左の肝要なるものの他に何をも汝らに負わせぬを可(よ)しとするなり。29即ち偶像に献げたる物と血と絞殺(しめころ)したる物と淫行とを避くべき事なり、汝等これを慎まば善し。なんじら健やかなれ』

こういうことでもって、ケリがついたわけです。これは

「エルサレムに於ける使徒会議」

というのですけれども、これは直接問題はないから、これで、第一伝道はここでおしまいといたします。そういう意味において、パウロが異邦伝道の最初を、キリストの実を、御言を伝えまた御業を行い現したという、第一段階のことで、午前の話は終りといたします。